



Title	黒龍潭－中国北部農村における財をめぐる儀礼的過程の研究
Author(s)	羅, 紅光
Citation	大阪大学, 1994, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/29175
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	羅 紅光
博士の専攻分野の名称	博士（人間科学）
学位記番号	第 11590 号
学位授与年月日	平成 6 年 11 月 7 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科 人間学専攻
学位論文名	黒龍潭 —中国北部農村における財をめぐる儀礼的過程の研究
論文審査委員	(主査) 教授 青木 保 (副査) 教授 厚東 洋輔 助教授 梶原 景昭

論文内容の要旨

本論文は、中国北部の農村「黒龍潭」における、1992年から1993年にかけて（1年間余り）のフィールドワーク研究に基づくものである。本分は、主として農家の生活における財の生産・所有・使用に焦点をあて、地域の「万元」としての有力者の権力と権威の結びつきを分析し、彼らのもつ財の意味を吟味する。最終的に中華秩序の基底にある農家生活の文化的秩序を検討し、その秩序における「上位」と「下位」の間の共感原理を考究することを目的とする。

ウィットフォーゲルは「水利社会」、「水利文明」を論じて、中国北部の内陸の乾燥気候に基づいた生活様式を発展させるには広大な灌漑事業が必要であり、その政治的統制の必要から強力な官僚国家の形成が促されたと述べる。ウィットフォーゲルが政治的支配を強調するのに対して、ウェーバーは中国の最高位の支配者の宗教的側面に光をあて、いわば皇帝の「カリスマ的支配」の局面を明らかにした。

このような水利社会において「財」とはどのような意味と作用をもつのかが、その「支配」との関係においてもまず重要な問題となる。従来の研究では、財の生産、所有は私的所有と関連づけて階級的ヒエラルキーの秩序としてうながされてきた。しかし、中国においては階級制度に結びつくような「私的所有の発展」は制約されていたのであり、俗世の世襲的な所有観念はこれまでとは異なった文脈で解釈すべきことが示唆される。

ウィットフォーゲルの分析では、物理的な問題として「地上の水」をどう分配するかが水利的農業生産にとって最も基本的な「財」の所有問題の一つだということになっている。

しかし、これには次のような問題点が指摘されうる。1. 軍事的勝利、政治的イデオロギー、経済的独占による支配には中国の官僚体制体系に見られる「上位の者」にふさわしい権威と結びつく「神聖さ」が欠けている。権力を「所有」観念の中で考える場合、中国の歴代の「上位の者」はいずれも彼の権力を世襲することは制度的に保障されていなかった。むしろ中国の歴史は権力の「王座」をめぐる闘争の歴史である。逆に比較的長くその地位を維持した「上位の者」は、彼の権力というより、彼の権威によってそれが可能だったといわれている。2. 灌漑用水路の届かない中国内陸の大部分の地域では、「地上の水」の問題だけでなく、「天上の水」をどう操るか、とりわけ農業生活における「上位の者」と農家との共感といった信仰レベルにかかわる権威の問題を問わなければならない。つまり「水」を農業生活の性格に

結びつく最大の「財」として考えれば、物理的な支配による「地上の水」より、「天上の水」のほうが最高位の司祭者にふさわしい神聖さを定義すると考えられる。

ウェーバーの研究は、最高位の支配者にふさわしい資質を論じた点で評価できる。彼は少なくともその神聖さの問題をとりあげた。だが、ウェーバーの研究の欠点は、彼が研究をあまりにも教義・経典レベルに限定したために、最高位の司祭者の神聖さはそれ自体として存在するのではなく、その神聖さを求める底辺の人びとの聖なる秩序のつくり方によるものである点を見逃したことだ。

以上の問題点をふまえたうえで、筆者は、水という恵みを財として捉え、伝統的な雨乞い儀礼の文脈においてその財のありかたを具体的に分析した。さらに農業生活を基盤に、財をめぐる生産・所有・使用をヨーロッパ的なカテゴリーと対比しながら、ことに現代中国の状況と関連づけて黒龍潭の人びとがどのように財を農業生産活動の過程の中で捉えていたのかを、すなわち彼らの財の意味論を考察した。筆者は「財を生産」すると同時に「意味を生産」するという財の意味論を評価して、財をめぐる一連の過程が人びとの感情にもたらす精神的な満足感を「富」として、いわば富を財から区別して扱う。そこで財が単に経済的な現象ではなく、当の文化によって定義され妥当性をもつことに注目する。その妥当性をめぐる思考レベルの共感の問題は本論文において重要な位置を占める。

黒龍潭は、農地が高さによって三段階にわかれており、川に近い農地には「地上の水」が合理的に分配されるが、灌漑用水路の届かない他の二種類の農地は、その収穫を祈願して龍の加護を求めなければならない。そのため龍が農家の間で篤い信仰の対象となりつづけてきた。農家および商人は自分たちの経済活動を円滑に行なうために、財を生産する段階から黒龍廟の儀礼的行為を通して、龍の加護を求める。その加護とは具体的には、おみくじを引いて、現世利益を保障する行動指針を得ることである。その行動指針は、中国歴代の王者や聖者のできごとという形で書かれ、それが参拝者にとっての「経験・教訓」としておみくじから読みとられる。その加護の結果に対して、たとえば経済活動が成功した場合、農家は、龍の靈験だと理解し、返礼の形で龍にお布施を捧げる。筆者はこの循環を思考レベルの「儀礼的ルート」と呼ぶ。反対に失敗した人は、さらなる儀礼的行為に走り、黒龍廟の聖職者を通しておみくじのメッセージから意味を読みとり、俗世の次元で自分の経済活動にまつわる状況を吟味しながら実践を行なう。こうして本来個人的な営為は黒龍潭の人間関係の中に組み込まれていく。その人間関係ではとくに「人の和」が要求され、当事者は俗世の中で財の獲得だけでなく、財の消費の次元でも人間関係を儀礼的に展開していく。結局、財から富への展開は、単なる財の獲得の次元にはとどまらない。裕福な者は人徳の持ち主でなければならない。このような人徳を彼らの言葉では「陰功」(いんこう)と称する。人びとがその「陰功」の有・無／多・少によって分類され、「陰功」を蓄積すればするほど、その「陰功」の所有者は礼的秩序の中心に近付き、「上位の者」とされる。この諸個人による儀礼活動が黒龍廟祭りに濃縮され象徴されている。祭りが盛大であることは黒龍の靈験を意味し、黒龍廟を運営する聖職者の「陰功」の高さをも示す。そのため他の龍廟は黒龍廟から「靈を借りる」儀礼を通じて「靈的交換」を行なう。黒龍潭一帯では道徳的中心とそれをめぐる周辺といった秩序がこうして築きあげられてきた。この秩序の中で、財をめぐる道徳的な論議がしばしば権力闘争に発展することもある。こうした地域において「上位の者」を含む秩序は、一つの聖なる空間をつくりあげており、その空間において、道徳があることは秩序の安定を象徴し、秩序の混乱は「上位の者」の不徳によるものだと解釈される。黒龍潭では、聖なる空間と俗世の空間がこうした龍の信仰によって道徳的に統合されている。

神聖なる龍の権威は、その靈験による財の放出にあり、龍を名乗った「天の子」としての俗世における皇帝の権力は、財の独占によるものでなく、「天の子」にふさわしい道徳的権威によって証明されるものなのである。その道徳の高さは、作物の豊作によって確認され、また秩序の末端としての地方役人の道徳性からもはかられる。その道徳の高さを目に見える形にしたのが、地方の名物を皇帝に捧げる、いはば「朝貢」儀礼に用いる品物であった。黒龍潭の場合には、伝統的に「干餈」(かんらく、煎餅の形をした小麦粉製の中華パン)が用いられていた。豊作を象徴する品物を媒介として農家と「天の子」は「朝貢」儀礼のルートを通じて互いに道徳レベルの確認ができた。皇帝の道徳的権威を維持するために、「朝貢」という俗世における儀礼的ルートはあたかも「徵収システム」であるかのように具体化されていたのである。

これまでの研究では、中華秩序において、最高位の者とその基底にある地域との結びつきは曖昧であった。官僚体系

の物理的な支配力に焦点をあてる実証主義的な分析では、特定の最高位の者による秩序は分析できても、それを支えてきた民間信仰レベルによって求められる神聖さの検討が不十分であるがゆえに、中国における歴代の政権交替を説明するには無力だといえる。また私的所有の分析方法では、財の多寡を階級的身分のファクターとして階級闘争の文脈で排除する社会主義中国の平等原理についても説明できない。

黒龍潭における龍の信仰に関する筆者の分析を通して、黒龍潭の農家の儀礼的操作は、俗世における単なる物理的な枠組をこえていることが明らかになった。それは黒龍廟でのおみくじの儀礼的操作を通じて、歴史と現在の現実とを結びつけることによって農家の主体性を確保しようとするものである。農家は歴史を「時間なき師」とする。富の実現に向けての農家のこの儀礼的行為は、常に中華秩序の頂点にある指導者との対話、および道徳的なレベルの確認を可能にした。中華秩序の末端ともいべき黒龍潭に見られるこのような秩序は文化的空間という意味においては黒龍潭にとどまらないといえる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、文化人類学的フィールドワークを基にして、中国北部の農村における財の追求の問題を調査・分析するとともに、これまでの中国社会研究の欠を補い、その理論的不備を修正しようと試みた、大変野心的かつユニークな研究である。

本論文の特色は、まず第一に従来の中国社会研究が南部の開発地帯に集中し、内陸北部に大きな学問的研究上の空白がみられることを埋めようとしたこと。そして、きわめて生々とした北部農村（黒龍潭）の農民の生活誌がおそらく文化人類学研究において初めて得られたことに求められる。このこと自体、一大学的収穫と評してよいものと思われる。第二に、問題を財の生産・所有・使用にしぼり、財の追求における成功者「万元」のもつ権力と権威の結びつきを分析して、「財」のもつ意味を解明しようとしたことである。とくに、黒龍潭において灌漑用水の届かない高地に農地を持つ農民が、「天の水」を頼り、それをこの村の守護神であるとされる黒龍への祈願（雨乞い）の儀礼を行うことによって得ようとする。その詳しい分析を通して、「上位の者」と一般農家との間に成立する共感によって権威が保たれることを明らかにした。しかも「黒龍廟」の儀礼で農民が授けられる指針は、中国歴代の王者や賢者の出来事を記す形で示されることから、いわば中国の大伝統と一農村とが結びつけられ、そこに儀礼的秩序が成立することを示した。これも従来の研究にみられない新しい本論文の発見である。第三に、「財を生産する」この意味論を、財の生産が人々にもたらす精神的な充足感に求め、それが「富」であると位置づけることによって、財を単に経済的現象でなく文化によって定義されてはじめて妥当性をもつことを明らかにした。財から富への展開を、「人の和」を尊ぶ人間関係の中で観察・分析している。本論文が提示するものは、他にも多々あるが、以上のようなフィールドワークに基づく実証的な研究の上で、第四に、ウィットフォーゲルやウェーバーなどの中国社会研究のもつ欠点を批判し、補正する理論的作業を行った。この面における学的収穫も十分説得力のあるものと評価できる。

本委員会は、この論文をきわめて高度な学術研究と評価し、博士（人間科学）の学位授与にふさわしい学的収穫と認めるものである。